

## 『PTAに思う』

ほぼ毎年でしょうか。4月・5月頃、新聞やテレビで、PTAに関する報道を見聞きします。主な内容は、「PTA役員のみなり手がいない！」または「強制的なPTA役員の決め方はいかがなものか・・・」といったものです。この状況は、ほぼ全国的に見られるようですし、なかなか厳しいというか「それはやり過ぎでは」と思われるような事例も紹介されています。

PTA活動は、概ね4月下旬頃に総会があり、ここで1年間の活動のふり返りと会計決算、新年度の活動方針と会計予算案が審議されます。最後に、新役員が事務局もしくは選考委員会から提案されます。よほど特別な事情がない限り、総会はつつがなく終わります。つまり、PTA事務局等の提案が了承されるのです。そうなりますと、5月頃には、各委員会レベルの（各専門部と呼ぶところも）の役員（委員長・副委員長など）決めを行います。

ここ数年、メディアがクローズアップしているのは、いわゆるPTA三役（会長・副会長・監査）や各委員会の役員（委員長・副委員長）が決まらず、学校も保護者も大変困っているということのようです。他に「なぜやらなければならないのか？」という声も取り上げています。

まず、PTA三役ですが、会員による選挙で決まることはまずありません。年度末までには、現三役と学校（PTA事務局）が話し合って人選します。「全員、留任します」ということであれば、何も問題はありません。現役員の中で退任されるケースが生じた場合でも、概ね会長さんが中心となって後任の候補者に打診し了承を得たうえで事務局に報告して頂き、三役会議において了承された後、総会に提案という運びになります。従って、PTA三役レベルの人選においては、学校側が悩んだり苦労したりすることはほぼありません。

困難性を生じるのは、まずは学級において選出しなければならない「各委員」です。各学校のPTAには、具体的な活動を担う「〇〇委員会」等があり、各学級にその人数が割り当てられます。つまり、学級からの委員の選出は、「出さねばならない」状況なのです。では、どのようにして選ぶのか（もしくは決まっていくのか）というと、新学期最初の学級懇談の場で、学級担任が進行役を務め、保護者の希望や意見を尊重しながら決めていくのです。この営みは、かなり大変なことです。

本来であれば、新学期最初の学級懇談では、「学級経営方針」の説明という極めて重要な内容があるわけですが、その後に「PTAの委員決め」が設定されていますので、保護者としては、どうしてもそのことが気になりになってしまうだろうと推測します（学校によっては、担任の方針説明とPTAの委員決めに分離しているところもあります）。

さて、この段階で、割り当てられた委員を全て決めることができれば「めでたしめでたし」ですが、そうなるのは稀だと思っています。「あと、ちょっと残ってしまった」くらいならまだいい方で、「けっこう決まっていない」状況ですと、担任としては、かなり辛い思いをします。なぜかと言いますと、残った割り当て分は、電話で担任が個別に保護者にあたって「やって頂けませんか」とお願いすることになるからです。これでも決まらない場合は、4月下旬から5月上旬に行われる「家庭訪問」の場でお願いすることになります（このような状況は、私の記憶に基づ

いたものです。今は、改善されているかもしれませんが、ただ、当時は「PTA業務も教員の仕事」という認識が当たり前でした。そして、私は、ある時点までは、学級に割り当てられた委員を、最初の学級懇談で円滑に選出できることが、担任の力量の一つとまで思っていました）。

何とか各学級から割り当てられた委員が全て選出されると、次の困難性は、各委員会の役員である委員長や副委員長を決める段階で生じます。「私、やりますよ!」と、立候補して頂ければ円満に終わるのですが、そういうケースはかなり少ないと思われます。おそらくどの保護者も、委員会活動を進める中心（代表）になったら、大きな負担がかかり苦勞することがわかっているからです。当町では見られませんが、「PTA祭り」のような活動を担う委員会の代表ともなれば、連絡調整だけでもかなり大変です。

各委員会レベルの役員決めも、活動を共にする中から良好な人間関係が生まれ、「次は、頼んだわよ」と、内々に促され了解されているケースもないわけではないのですが、保護者間で上手くコミュニケーションが図られ、いい塩梅に決まってく土壌は失われつつあると感じています。

ですから、立候補がない場合、話し合いで決まることはまず難しいので、最後の手段としては「くじ引きで決めましょう」になってしまいます。この方法は、できれば避けたいところですが、やむを得ずの選択になります。当然、この方法で決めるためには、事前にPTA会長名で会員（保護者）にお知らせし、総会で審議し了承を得ます（私の教頭時代のことです）。

「くじ引き選出」のことにもう少し触れます。これは、最後の手段なので、まずは、話し合いで選出を試みます。この段階で円満に収まることもあります。残念ながら、そうでない場合、「では、くじ引きにより選出になりますが、よろしいですか」と出席された会員に再度確認します。ちなみに、「くじ引き選出」については、事前にその趣旨を説明し、「この会議にはくれぐれも欠席しないように」と周知していますので、余程の事情がない限り欠席する方はいません。各委員会にはPTAの三役と事務局長（教頭）がそれぞれ入り進行します。

たまたま、私が入った委員会。結局は「くじ引き選出」になりました。そして、欠席された方が一人おりました。出席者の了承を得て、その方の代わりに私がくじを引くことになりました。結果は、何と委員長を当ててしまいました。その瞬間、何とも言えない雰囲気になったことを鮮明に覚えていますし、私自身心の中で「何でこうなるの!」と叫びました。その後、その方に電話で経緯を説明し理解を頂いたので、何とか丸く収まりましたが・・・。

PTAにまつわる学校現場の苦勞の一端を書きましたが、保護者にとっても、様々な大変さがあります（活動内容によってその大変さに差はありますが）。活動そのものには、意義や価値があります。また、活動を通して保護者同士や教員と保護者間における良好な人間関係の形成に寄与し、学校教育の円滑な推進や質の向上にもつながる可能性は大であると思っています。

一方で、例えば私が一般教員をやっていた頃（およそ30～40年前）とは、だいぶ社会の様子や価値観が変わってきていると思いますので、連綿と続いてきたことを、これからも同じようにやるということにはかなり無理があると考えます。また、「やらせられている」感が強いとうまくいかないものです。加えて、時間には限りがあります。皆、それぞれの事情があり、忙しいのです。今、誰もが、社会の変化に主体的に向き合い、考え、対応することが求められています。PTAの在り方についても、一度立ち止まって考えてみることは大事なのではと思います。